

やはり俺が3 4 6 プロに所属するのはまちがっている。

巢羽流

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷くんが346に所属するお話。

基本的にアイドルとの絡みがメインになる予定です。

一応アニメのシンデレラガールズがベースになりますがちよくちよく設定がオリジナルになると思います。

比企谷君の性格が違っても。

9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
66	59	49	40	32	22	13	7	1

目次

1話

「はあっはあっ」

ネオンが光る大通りの脇道を、大粒の雨が降り注ぐなか事前に確認したルートを奔走している。

息が苦しい。いったいどれ程走ったんだろうか。すこし休みたい。しかし近くから聞こえるけたたましいサイレンの音がそれを許さなかった。

よし…あそこを曲がれば目的地だ…

「お兄ちゃん…」

やっこの思いで目的地に着くとそこには悲しい目でこちらを見据える少女が立っていた。

高校の制服に身を纏った美少女。背中くらいまで伸ばした髪を纏めポニーテールにしていた。

「なんでここが…」

「分かるよ…だって…私はあなたの妹だから」

「そうか…そうだな…お前には分かるか」

「そうそう。どれだけ一緒にいたと思ってるの？お兄ちゃんのことなら何でもお見通しなんだからね？」

ポイント高い！と笑うその姿にどこか懐かしく感じる。

「…ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ」

「自首して」

「…」

「お母さんとお父さんが居なくなっただけで私たちの…ううん。私のためにやってくれたって分かっている…でも！」

気がつけば少女の目からは大量の涙が溢れてやまない。

「自首はしない」

「…」

少女は黙って下を向いてしまった。

「急いで。じゃあな」

「待て！動くな！」

「っ！」

彼女の隣を抜けて行こうと歩き出すとこの路地の四方八方から拳銃をもったスーツの男たちが姿を表した。俺の秘密の隠し道からも警察の制服を着た男たちが出てきたな。

もうどう足掻いても逃げられそうに無い。

「お前の仕業か……」

少女は涙をただただ流しながら俺を見据える。

「まったく……さすが我が妹だ……ここまで追い詰められちゃあもうどこにも逃げられねえよ」

「お兄ちゃん……」

「お前は本当に強くなつたんだな……俺は余計なお節介をしていたのかもしれない……」

「私も一緒に頑張るからさ！やり直そう？」

その目からやはり涙は止まらず藁にもすがる、そんな感情が見ているだけで感じ取れた。

本当にこいつはすごいやつだと改めて思わされる。

「いや……俺はもう後戻りは出来ないんだ」

そうして俺は懐からとあるものを取り出す。ひどく無骨で黒々としたそれを自らの頭へ当てた。

「何をしてる!? バカな真似はよせ！」

警察のやつらは慌てて俺との距離を詰めに来る。

少女は驚きに目を見開きただただ震えていた。

まったく何て顔してるだよ……

そんな少女へ微笑みを向ける。

「元気で暮らせよ……愛してる」

「お兄ちゃん！やめて！」

少女の叫びと共に雨で湿気た空にひどく乾いた音が鳴り響き俺は全身の力を全て抜いて倒れた。

アブラゼミがやかましく鳴く、蒸し暑い夏の午後を夏仕様の通気性抜群なスーツを纏いネクタイをきちつと締めていた。

俺、比企谷八幡の現状は都内の私大に通う大学二年生なのだがなぜスーツを着ているのか。それはこれから仕事に向かうからだ。

くそお：高校生の時の俺にこんな姿見せたら家に引きこもっちゃうよ。

…すでに引きこもってたな。

それにしても暑い…。スーツについていても高校の制服とさほど変わらんだろう。高校生の頃に比べていささか暑さへの耐性がなくなった気がする。

「ふう…着いた」

都内のビルの中で一際目立つ建物がある。その見た目はまるでシンドレラの城のような、豪華であると共に気品を感じる。そんな建物の中へと足を踏み入れた。建物のなかも圧巻の豪華さである。シャネリアもある豪華な内装に加え、うちのアイドルのポスターが大量に張ってあった。

「おはようございます。比企谷さん」

「おはようございます」

受付の美人なお姉さんに挨拶をし社員証を首から下げる。

皆さんお察しと思うが俺がしている仕事というのはアルバイトではない。この俺、比企谷八幡は美城プロダクションに所属している社員なのだ。社会に出た俺はどんなに美人相手だろうともう噛むことなどない。

へへ：俺も学生でありながら社畜になっちゃったか…。

専業主夫になろうと思っていただけだがなぜかこうなってしまった…。ちなみに職質の際は必ず大学生だと言うことにしている。まだ

大学生なのに社畜になりたくない俺の唯一の抵抗である。

余談だが職質は月に二回のペースでされる。

俺のながいけないのか…皆目検討つきません。

分からないってことは俺には何一つ非がないということだ。つまり社会が悪い。

本館から少し離れたところにあるオフィスビルのとあるフロアに向かうと、俺のデスク近くに髪をポニーテールにしてふわっとした雰囲気少女が立っていた。

「あつ！比企谷さん。おはようございます」

「おはよう。はやいな高森さん」

「はい！今日は頑張った映画の試写会ですからね。つつい早く来ちゃいました」

本当に仕事の事を楽しそうに話すな。非常に羨ましいですねほんと。

「相変わらずすごいやる気だな」

「そんな、すごくなんて無いです」

「ってこんな時間か。わるい、すぐ準備するから下の車で待ってくれ」

少しだけ談笑したつもりだったがもう10分も経ってる。

高森さんはスタンド使いか…マフィアのボス的ななにかだろう。

急いで台本をまとめ社用車がある地下へ向かうと高森さんはすでに車の後部座席に座っていた。

「わるい。お待たせ」

「いえいえ。こちらこそよろしくお願いします」

「はいよ」

俺は運転席に座ると急いで車を出す。

きゆるきゆるきゆるとタイヤがスピンした音が聞こえた気がする。

急発進をするのは実は好きだ。

立ち上がり早いのは、ラリー用のクロスミッションを組んでいるからだ。あれなら美城のタイトなヘアピンに2速ギアがピツタリ合うだろうな。

やっぱりこう言うときは走り家の台詞が一番気持ちいいぜ…

「いつも急発進ですよね…それ以外は普通なのに」

「わるいな。癖になっちまって」

「もう…気を付けてくださいいね?」

頬を膨らませぷりぷり怒っているようだが全然怖くない。むしろ可愛い。これがアイドルか…我がラブリーエンジェル小町にもひけをとらないぞ。

そんな美少女と談笑しながら俺は目的地に向かっていった。

—————

「やばいつ!走って高森さん!」

「は、はい!」

俺たちは盛大に映画の試写会に遅刻した。

渋滞におもつきし捕まった結果だ。

「おまたせしました!」

会場に到着したのは10分遅れ。

かなりアウトだろう。

「やっと来たか!司会に伝えに行け!」

俺たちの到着を確認し、スタッフさんがいそいそと動き回る。

本当に申し訳ない。ぼっちが他人に迷惑をかけるなんて…ぼっち失格だ俺は!

『皆さん!今、到着されました!拍手でお迎えください!今回の主演女優!清水清子役の高森藍子さんです!』

ステージの司会の女性がマイクで会場に伝えると高森さんはステージに出ていった。

出た瞬間の拍手はすさまじくフラッシュもおびただしいほど降り注いでいた。

「ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げて申し訳なさそうに微笑む彼女を多くの観客があたたかく拍手で迎え入れる。

彼女は売れっ子アイドルと呼ばれる部類に居る。この前出したシングルはオリコンに名を連ねバラエティーなんかでも一週間に何度

も目にする人の方が多いだろう。

そんな彼女が立つのはきらびやかなステージ。多くの観客の賛辞を受けその期待に答えるように手を振る。

誰しもそういったものに憧れる。例えばアイドルや俳優なんかもそうだ。なにかに打ち込んだこともないやつは大抵俳優としてあのステージに登ってみたいと妄想するものだ。

それだけあのステージは、あの場所は非日常の中にある。多くの人の羨望の先にあるのだ。

俺も以前はそうだった。

今はまったくそう思わないけどな。

あの場所に居るとどれだけしんどいか知ってる。

居続けるのにどれだけ努力し続けなきゃいけないか知ってる。

なぜかって？そりゃ…

『続いてはもう一人遅刻人、清水清子の兄である清水清志役！比企谷八幡さんです！』

俺はもうあの上に立つ側の人間だからな。

俺は比企谷八幡、19歳。

職業は大学生、そして俳優だ。

2話

比企谷八幡。

職業俳優。

俺が俳優になったのは大学に入学してすぐだ。

帰宅途中の公園でたまたま撮影をしていた映画の監督が俺を発見。そのままスカウトしたのがきっかけだった。

役柄がヒロインの兄で普段は平凡に暮らしているが、ふとしたときにどこか闇を抱えてる顔をする、裏のある人物というものだった。

どうやらこの目は監督のイメージ通りだったらしくお声がかかったと言うわけだ。

この話を聞いたとき俺はもちろん断った。

この俺が多くの人間の目に晒されるなんてありえない。

考えただけで鳥肌がたつ。

なんなら見られたストレスで病気になるまでである。

しかしながらこの監督、業界では頑固者として有名であり俺に三顧の礼よろしく13回ほど付きまわってきた。

おっさんにストーリーカーされるとか堪ったものではない。

大学に来たときなど必死懇願するおっさんと逃げる俺と言う恐ろしい様を周りに見られ白い目をされたものだ。

いい加減うんざりしてきたころ、映画に出てほしいとスカウトされた事が小町にばれて猛プッシュをされてしまったそれが決め手となり、一回だけと言うことで出演を了承してしまった。

ここで折れたのが運のつき。

この映画なんと大ヒットした。どこか影のある兄を演じた俺は5分もないほどの出演時間だったのに、なぜか大反響。あの無名は誰だとマスコミは大々的に放送したのだ。

正直油断した…。

超絶有名な俳優が主人公、今勢いのある若手アイドルがヒロインをしてたんだから仮にヒットしても俺に注目が集まるとは思わなかったわ。てか主演の二人より話題を集めちまうとかなんなの？もしか

して俺人気者の才能あった？

こうなってしまうたら俺が祭り上げられるまで速かった。

またしても小町の猛プッシュと、監督の手によりあれよあれよと言
う間にこの美城プロダクションの俳優部門に入ることとなった。

「比企谷さん？聞いてますか？」

「ん？すみません。なんでしたっけ」

そうだった…今試写会の途中だった。

一作目の大ヒットによって即続編である映画の撮影が行われた。
その主要メンバーには当然俺もいるわけで俺はここにいる。

こんな大勢の前に立つ事が辛すぎてついつい現実から目を背け
てしまっていた。

ほんと何この拷問。マスコミはフラッシュ焚きすぎなんだよ。こ
んなに光を浴びたら俺は溶けるぞマジで。

「もう…しっかりしてよねお兄ちゃん」

「わるかったって清子」

俺の事をお兄ちゃんと呼んで良いのは小町だけだ！…って思っ
たんだがこんな美少女に何度もお兄ちゃんと呼ばれると…良い。う
ん良いな。

「それで何を喋れば良いんですしたっけ？」

『今回の比企谷さんの役である清志はどのような鍵を握ってるので
しょうか』

司会のお姉さんの台本通りの質問。

やつべ。まったく聞いてなかったわ。

俺は一作目が終わり美城プロダクションに所属してから即続編を
撮った為、演技以外のスキルが著しく足りてない。対人関係は撮影の
時に一癖も二癖もある俳優たちによって嫌でも鍛えられたが、まだま
だこういうた多くの人の前で話すのは馴れない。

落ち着け俺。

台本の通りに読めば大丈夫だ。大丈夫なはずだ…。

「今回の私の役は」

「つかれた…」

事務所のデスクに力なくもたれる。

ああ：頬が冷たくて気持ちい。

地獄の様な試写会をなんとか終え、遅刻の謝罪を各所にし終わった俺はもう全身の力が抜けてヤバイ。

てかあの主演の男優のアドリブ多すぎなんです。思わず噛んだじゃねえか。俺があたふたしてるの見てにやにやして性格が本当によろしい人だよほんと。

「お疲れ様です」

「そつちもおつかれさん」

同じ遅刻人の高森さんも俺と一緒に謝罪に回ったが流石現役高校生。事務所に帰ってきてても少し疲れた程度みたいだ。

俺はもうダメだ：はやく家に帰りたい…。

「比企谷さん今日はもう終わりですか？」

「そうだな。後は帰るだけだ」

そう答えると高森さんはぱつと明るい笑顔になった。

あれ？これはもしかや…

「よかったら一緒に散歩いきませんか？」

やっぱりか。普通に散歩するだけなら良いんだが高森さんとするとか軽く二時間は歩くことになる。

30分ほどの道を歩いてるはずなんだけどなぜか二時間もかかるんだよな。正直つかれたからすぐ帰りたい。

「…」

俺が返事に迷っていると高森さんはみるみる不安そうで申し訳なさそうな顔になっていく。

…はあ。その顔はずるい。

「分かった。行こう」

「はいー」

不安な顔は一瞬で吹き飛びいつもの優しい微笑みが戻ってくる。
一色よ…これが天然のアザときだ。

「いつものところで良いか？」

「はいー」

高森さんと仕事後の散歩は回数を覚えきれないほどの頻度で行っている。なのである程度歩いてて気持ちいいプロダクション周辺のコースは頭に入っていた。

俺達は眼鏡や帽子など最低限の変装をし夕日が照らす茜色の公園に向けて歩き始めた。

「比企谷さん、比企谷さん」

「ん？どうした？」

「映画、好評でしたね」

「そうだな」

映画の出来は完璧と言って遜色ないものだ。脚本は文句なし、俺を含めた俳優も全員が実力の全てを出した。実際今日の試写会で映画を観た人の中には涙を流す人も居たほどだ。

「またヒットすると良いな」

「はいーそうしたら続編もまた一緒に撮れるかも知れないですよ」

「いや、続編出ても俺死んでるから出番ないだろ」

「はっ…たしかにそうかもしれないですね」

にこここしたりはっと驚いたり表情がころころ変わるな。

やはり美少女は何をしてても良いものだ。かわいい。

「続編をやることになったら頑張れよ」

「頑張りますけどやっぱ比企谷さんが居ないのは寂しいですね…」

「俺はやっと仕事から解放された事で逆に清々しいけどな」

「私は…やっぱ寂しいです」

「まあ…なんだ。番宣とかでまだ共演する機会あるし、なんなら事務所ですらでも会おうと思えば会えるし大丈夫だろ」

「そうですね…そうですね！」

しよぼん顔が一転ふわふわとした微笑みに変わる。

「じゃ俺もあと少し頑張るかな」

「頑張りましたよー！」

高森さんはそういうと前に飛び出し両手でガッツポーズをする。

「あっ」

「っ！」

後ろ向きなっていて足元を見ていなかった高森さんが何かにつま
ずき転びそうなる。

女の子特有の柔らかさを伴う彼女の背中を抱き寄せるように支え、
寸の所で転ぶのを防ぐことができた。

「大丈夫かつ？」

「あ、はい…ありがとうございます」

危ねえ。後ろから怪我でもしたら大変だ。

「あの…もう離してもらっても大丈夫です」

「あっ！すまん」

体を支えるために背中を抱き寄せたままだった。

決して女の子の体の感触を長い間味わいたいかそんな不純な気
持ちはない。

…ホントダヨ？

てか高森さん顔真つ赤にして俯いてるし。

いつものほんわかした空気と少し違ってなんか年相応の可愛らし
さを感じる。

「…怒ってます？」

「お、怒ってませんよ！ただすこしびっくりしただけで」

「セクハラで訴えない？」

「訴えません」

あつぶね！週刊誌にセクハラで取り上げられところだった。

最近の芸能界は未成年に対する交際とかで問題が多いから異性と
の距離感には気を付けなければ。

てか異性との距離感なんて分からねえよ。なんなら人間との距離
感も分からないまである。

「良かった」

「お兄ちゃんに助けてもらえて嬉しかったよ?」

頬を赤らめながらイタズラっぽく微笑みを向けてくる。

八幡にクリティカルヒット。八幡は妹がほしくなった。

つぶねー。持ってかれかけたわ。

てか可愛すぎませんかね?こんな妹いたら千葉の兄妹としてあるべき姿になってしまふところだった。

俺の妹がやはり小町で良かった。

「いきなりは驚くだろ」

「助けてくれたお返しです」

「たく…さっさと行くぞ」

「まってよお兄ちゃん」

「お兄ちゃんはやめろって」

「お兄ちゃん♪」

「勘弁してくれよ」

結局お兄ちゃん呼びは二時間に及ぶ散歩終了まで継続された。

3話

いつもより蒸し暑い夏の午後、外は地を打つような野太い雨によって覆われている。

俺は美城プロダクションにあるカフェの室内スペースで一休みしていた。

今日は朝から番宣のため朝から国民的五人組男性アイドルとVSするバラエティーに出演してきた。

俺も無事バラエティーに初出演を果たした訳だがめっちゃくちや疲れた。

今までテレビの向こうで見ていた人と話すなんて緊張しないわけではない。話振られるときよどつちやうしもう嫌：あんな姿全国に晒されるなんて想像したくもない。

明日地球滅びないかな…。

「比企谷さん？どうしたんですか？」

「いや、なんでもない」

そうですか？と小首を可愛らしく傾げるのは現在人気急上昇のアイドル、高森藍子さんだ。

番宣のための収録であるなら当然彼女と共演し、その帰りにカフェに行つて一休みをすればと言ったら私も行くと言ってきた。

最近高森さんがやたらと俺に付いてくるんだが：アイドルなのに男の俺と一緒に居て良いのか？

「そろそろ注文しませんか」

「そうだな。安部さん！」

「はいー！」

少し離れた所に居るメイド服を身に纏った美：少女？に声をかけるとこちらに駆け寄ってきた。

「比企谷くんは藍子ちゃん！いらっしやいませ！」

「こんにちは安部さん。注文良いっすか」

「はい！どうぞ！」

「はい！比企谷くんはいつものセットで良いですか？」

「はい。それで」

「かしこまりました！藍子ちゃんは？」

「私は紅茶とモンブランをお願いします」

「かしこまりました！少々お待ちください！」

元気に返事をして安部さんは厨房に消えていった。

安部菜々さん。彼女は俺が美城プロダクションに入る前からここに所属している事務所の先輩だ。自らの出身地をウサミン星、年齢を永遠の17歳と言い続ける所謂電波系アイドル。まだまだ売れているとは言えないが今後は専属のプロデューサーが付くと話していたし有名になっていくだろう。

「そういえば何で比企谷さんは年下の菜々ちゃんに敬語を使ってるんですか？」

俺が安部さんに敬語を使っている理由？

ある日プロダクションに落ちていた財布を拾い、中を見てみるとゴールド免許が入っていた。それだけだ。

「年下とはいえ事務所の先輩だからな」

「私も比企谷さんから見たら先輩なんですけど」

「高森さんは俺に敬語を使ってほしいんですか？」

「い、嫌です。敬語はやめましょう？」

あたふたと慌てる高森さんかわいい。

「お待たせしました！モンブランと紅茶のセットと比企谷スペシャルですー！」

「ありがとうございます」

説明しよう！比企谷スペシャルとはコーヒーにこれでもかとガムシロとミルクを入れた究極の一杯にパンケーキが備え付けられた最強のセットなのだ！

「作ってる菜々が言うのも何なんですけど…そのコーヒー飲むのはもう少し控えた方が良くないじゃないですか？」

「千葉県民のソウルドリンク、マックスコーヒーが置いてないからこれで代用してるんです。あるならこれは頼みませんよ」

マッカンが無いのがいけない。このプロダクション自販機に

マツカンが無いとかおかしい。

「マツカンへの愛は地元民の私も分かるんですけど流石にこれは体を壊しちゃいますよ?」

地元民って…ウサミンでは無いのか…?

本当にこの人は脇が甘すぎる。マツカンよりも甘いまでである。これで設定を押し通し続けられるつもりなのも甘い。

「安部さんは俺のオカンですか?」

「なっ…まだオカンなんて歳じゃ…ないです!」

ちよつとした間が空くんですかね…そういうところですよほんと。

とにかく!次は何を注文されてもブラックを出しますから!と告げ安部さんは厨房へ戻っていった。

おいおい…この業界は俺には苦すぎるんだからコーヒーくらい甘くしても良いじゃねえか…。

「じゃあ食べましょうか」

このあとたった一杯のコーヒーとケーキを食べるのに二時間半も時間が過ぎ去ったのだった。

—————

コーヒーブレイク後、俺はパパッとスケジュールの確認と業務日誌の記入を済ませた。これなら今日は6時には帰れそうだな。

次のバラエティの台本を読んでいると俺のデスクの内線電話が鳴り響いた。いったい誰だ?

「はい、比企谷です」

「もしもし、横須です」

横須さんは高森さんの担当をしているプロデューサーさんだ。一見中肉中背の地味系な男性なんだが高森さんの他に数名のアイドルをプロデュースし成功させてきたやり手のプロデューサーだ。

「どうかしたんですか?」

「比企谷くんってさ…今日車で来たよね?」

「はい。雨が降ると予報で見たので」

そう、実は俺大学生なのにそこそこ稼いだお陰で中古だが車を買っ

た。ちょうど某走り屋のアニメにはまったし車がほしくなっちゃったのだ。

「それがどうかしたんですか?」

「悪いんだけど帰るときにうちのアイドルを家に送ってやってくれな
いかな? 雨が強すぎて流石に歩いて返すのは忍びなくて…」

窓から外を見てみると昼に比べ明らかに雨足が強まっているのが
分かった。風も吹いていてまるで台風のような。

「俺は急ぎで作らなきゃいけない書類があるし…明日までに作らな
きゃいけない企画書もまだうじやうじやで…ああ、今日は何時帰れる
んだろ…ははっ」

「よ、横須さん。送りますから元気だしてください」

「ありがとう…助かるよ」

そんな消え入りそうな声で頼まれて断れるほど俺の心臓に毛は生
えてない。

てかプロデューサー業怖い…俺プロデューサーじゃなくて良かった…。

俳優も嫌だけどな。そう考えるとやっぱり専業主夫、良いと思いま
す!

「俺は6時頃に仕事終わるんで、そうしたらそっちに行きますね」

「ああ。よろしく頼む」

—————

「ふう…」

一通り明日の仕事の台本を確認し終わった。時計は五時五十分を
指している。

時間通りに終わったか…。

帰る準備を済ませ横須さんのプロジェクトルームに足を運んだ。

「失礼します」

「比企谷くんか」

「迎えに来ましたよ」

「ほんと助かるよ。ありがとう」

横須さんの顔から生気が感じられない…いったいどれ程の激務なんだ…?」

「比企谷さん!よろしくお願いします!」

「ああ」

高森さんはそんな横須さんの脇からひよこつと顔を出してきた。可愛い。

そういえば高森さんの家ってどこだ?流石に知らんな…。

「あ、あの」

「ん?」

高森さんの横には美少女が二人並んでいた。一人はショートヘアに俺とよく似たアホ毛が特徴の可愛い女の子。もう一人は背が低くたれ目でサイドの髪がエグいくらい外跳ねしている女の子。

「えつと…小日向さんと輿水さん?」

「はじめまして。小日向です。今日はよろしくお願いします」

「はじめまして。輿水幸子です。よろしくお願いしますね」

「はじめまして。比企谷だ。よろしく」

なんと言うか…うん。可愛いを具現化したような女の子たちだな。王道アイドルって感じた。カワイイ。

「この二人は寮なんだ。よろしく頼むよ」

「分かりました。じゃあ行くぞ」

「はい。プロデューサーさん!お疲れ様です」

「おう。みんな気を付けて帰れよ」

「二はい!」

「じゃあ頑張ってくださいね」

「ありがとな」

横須さんに見送られ俺達は地下駐車場へ向かった。

「あれが俺の車だ」

俺の車は旧型のイン○ツサ、走り屋に憧れたので勿論MTだ。正直MTにしたのは後悔している。慣れたとは言えATに比べるとやはり面倒くさい。

「カッコいい車ですね」

そう言うと高森さんはいつもの定位置、運転席の対角線の後部座席に座った。

あそこに座るとバックミラー越しに俺がよく見れるらしい。
「お願いします」

高森さんに続き小日向さんも後部座席に座る。さらにそれに続き奥水さんも…つてあれ？

「カワイイボクが助手席に座るなんて比企谷さんも幸せですね！」

「いや、なんで普通に助手席に座ってんの？後部座席行けよ」

「もう後部座席はいっぱいじゃないですか！」

「いやいや五人のりだし。それに君らなら3人入るでしょ」

「何言ってるんですか？このカワイイが助手席に座っているのに何か不満でもあるんですか？」

「君アイドルでしょ…変に距離が近いとパパラッチの餌食になるかもしれないし」

もしも学生に手を出したとなれば俺は社会的に抹殺されてしまう。
絶対ダメ！未成年とのお付き合い！

「そんなこと気にしてですか？ボクたち皆変装してますし大丈夫ですよー！」

「いやでも…」

「良いから早く行きましょうー！」

「…はあ。分かったよ」

まあ気にしすぎか…後ろに二人も居るし大丈夫だよな？

仮にこれで文春砲くらったら奥水さんに養ってもらおうか。

エンジンも暖まってきたのでいざ出発。ローギアに入れ勢いよくクラッチを離すとガクンと気持ちの良い加速を感じる。

ATは楽だが発進はMTが一番楽しい。

「もう、比企「比企谷さん！なんですかその運転は!？」」
「…」

「え？何が？」

「カワイイボクが乗ってるですからもつと丁寧に運転してください！」

「あー…わりい。つい癖で」

忘れてた。てか輿水さんすげえな。ここまで自分カワイイと言えるとは…。実際カワイイけど。

「高森さんと小日向さんもごめんな」

「いえ、私は大丈夫です」

「私も慣れてるから大丈夫ですよ」

「そういえばさつき高森さんも何か言いかけたか？」

「いえ、何でもないですよ」

「そうか？」

「ちよと！まだボクの話は終わってませんよ！」

「ええ…もう謝ったじゃん」

「全然反省の色が見えませんが！比企谷さんはボクがどれだけカワイイか分かってますか!？」

「分かってるよ。カワイイカワイイ」

「そのなげやりな感じはなんですかもう！」

「いやいやカワイイってちゃんと思ってるよ」

「そ、それなら良いんです」

「おお、それだけカワイイなら小学校でもモテモテだろ？」

「ボクは中学生ですよ！」

「えつまじで!？」

中学生!?!これで!?!

まあ確かに見えなくはないのか…?

いや、やっぱり小学生だろ。小町の中学生の頃に比べて幼い気がする。

「マジです!?!13歳ですよ!！」

「あまりにカワイイから小学生かと」

「そんなんじや誤魔化せませんよ!！」

「ちっ…めんどくせえ」

「舌打ち!?!舌打ちしました!?!」

なんなんだこいつ。初対面なのにこんなすばずばと言うやつは初めて…いや、高校時代の部活のメンバーに一人いたな。

「つと、寮についたぞ」

流石寮だ。近いな。いいな…俺もこの近さがいい。

一応男性寮もあるらしいが、色々しがらみがありそうだから嫌だけだよ。

「比企谷さん。ありがとうございます」

「おう、小日向さん。おつかれ」

「ありがとうございます」

「輿水さんもおつかれ」

「この話の続きは今度みっちりしますからね！」

「はいはいお疲れ」

「むう…お連れ様です」

はあ…なんか疲れた。輿水さんってあんなだったのか。テレビと全然キャラ変わらねえ。

なんであんなポジティブなの？俺にもその自信分けてほしいわ。俺のネガティブと足して割ったらちようど良さそうだしな。

「高森さん。どこにいけば良いんだ？」

「えっと…〇〇の方です。たぶん車で15分くらいで着きます」

「ん、了解」

今度は急発進にならないようにゆつくりとクラッチをつなぐ。これが慣れるまで難しいんだよ…。

「にしても輿水さんって、すごいな。いつもあんな感じなのか？」

「はい」

「そうか…」

「…幸子ちゃんと仲良くなってましたね」

「どこをどう見たらそう見えるんだよ」

実際ダメ出しされただけだし仲良くなったとは違う気がするんだが。

「…」

「…」

えっ、どうしたこれ。

いつもはゆるふわオーラ纏わせてにこやかな会話するのになんか

今日は雰囲気が違う。

「ここは歳上として会話のリードをしてやるとするか。」

「高森さん? どうした?」

「えっ! いえ、何でもないんです!」

「えっと…」

はい無理だ。そもそもそれが出来ればぼっちになってない。

「あっ! そういえばこの前茜ちゃんが…」

いつも通りのゆるふわ空間が次第に生まれてきた。

いつものもの感じに戻ってきたなら、まあ言いたくないことを無理矢理言わせるのも変だしこれ以上の追求は無しだ。そもそも本当に何も無いかもしれないし。

「あっ! その道の道を左です!」

「…おう」

「その次を左で次の交差点を右で」

「了解」

「あの家です」

「あれか」

ここに住んでるのか。案外俺のアパートに近いんだな。

「今日はありがとうございました。また明日も頑張りましょう」

「ああ。お疲れ様」

高森さんは車から降りると走って家の中に入っていった。

そういや明日もバラエティーか…たしか衝撃映像のゲストだっけか。芸人いっぱいだよな…嫌だな。

それに頑張ろうって。

俺の嫌いな言葉が一番が「努力」で二番が「ガンバル」なんだぜー

! オー! ノー!

「…帰るか」

ガコンとローにギアを入れ大雨の中、狭い住宅街の路地をノロノロと進んでいった。

4話

俺のオフィスより二つ上の階にある一室の扉の前に俺は立っていた。

時計を確認すると13時ぴったしだ。

ノックをするとどうぞ、と低い男性の返事が聞こえてくる。さて：行くか。

「失礼します」

「比企谷君、来たか」

「部長、どういった用件で？」

この黒髪の中に白髪が多数生えている初老の男性は俺の直属の上司だ。俺が美城プロダクションに所属する際に色々と根回しを行った張本人だと言える。

「そんな事聞かなくても分かってるんだろ？」

「まあ…」

「ほら、次の仕事だ」

一冊の冊子を手渡してきた。

俺にはマネージャーが付いていない。デビュー当初から知名度があつた俺は既に仕事を取りに行かなくてもオファーが来る状態だった。

人手不足なのもあり比較的手間のかからない俺には専属のマネージャーを付けず部長が仕事を斡旋し、大まかなスケジュールを立てて俺に回してくる事になっている。

俺にマネージャーを付けようとする話もあつたが部長が俺が人付き合いが苦手なことも人手不足と合わさりこの体制になったらしい。

「次は…ドラマですか？」

「ああ。ドラマと映画じゃ勝手が違うからな。勉強してこい」

「すごく嫌なんですけど」

金を払ってわざわざ見に来る映画と違い、テレビドラマならば気軽に見ることが出来る。そうになると老若男女問わずいろんな人に見られるわけで…また知名度が上がるわけで…

とにかく嫌だ。

「君に拒否権はないよ」

「…ですよね」

「頑張つて」

「はい。失礼しました」

ドラマ…ドラマか…嫌だな。

扉を閉めると深い深いため息が無意識に胸の奥から出てきた。

—————

ドラマは正義感の強い愚直な女性警官がドラッグや万引きなどの少年犯罪に立ち向かうというものだ。

俺の役はヒロイン兼主人公である女性警官の部下。

部下警官はやる気や覇気がほぼ無く、主人公が居なければサボつてばかり。しかしながら頭は切れるため主人公に核心を突いたアドバイスをする重要な役どころだ。

覇気の無い部下は主人公に引っ張り回され共に事件を解決するというのが基本的なスタンスらしい。

犯罪者の次は警察かよ。真逆じゃねえか。

それにしてもまた、知らない人だらけの中で仕事か…憂鬱だ。

カフエスペースで比企谷スペシャル（ブラック）を啜りながら企画書を眺めていたがやはり憂鬱な溜め息が止まらない。

この主演女優、うちのアイドルらしいが年上だ。

年上の美人と一緒に撮影とか勘弁してもらいたい。声が上ずってしまうこと間違いなし。

そして現場でからかわれて番宣のバラエティーでも話のネタにされる。また全国ネットで醜態を晒されるのか。

ああ…やっぱりやめたい。

「あなた比企谷君？」

なんだと振り替えるとそこにはおさげがよく似合う童顔の美少女が仁王立ちで佇んでいた。

童顔低身長であるのに出るところ出て見事なトランジスタグラマーだ。

ニユートン先生の万乳引力になんとか抗わなくては。

未成年との淫行は…etc

「…はい、そうですが」

「やっぱり！」

両手を合わせてなにやらはしやぎ出す美少女。え？誰この人。

「えつと…アイドルの方ですか？」

「あたしは片桐早苗！今度ドラマで共演する予定よ！」

「片桐早苗さん…つてええ!？」

「あはは！ずいぶん驚いてくれるわね！」

うっそこの人が主人公？

ちよつと待ってれ俺が想像してた年上の女性とはイメージが違いすぎる。

「…？じつと見つめてきてどうしたの？」

「…本当に28？」

「レディに年齢の話をするんじゃないわよ」

「うっす」

この眼力、我が恩師平塚先生のようなだ。アラサーで間違いないだろう。アラサー独身女はみんな眼力が強くなるのかしら。

「…」

それにしても未だに信じられない。どう考えても高校生だ。この人が制服を着ていてもなんら違和感など無いだろう。

まあ確かに体の一部分は子供とは言いがたい訳だが…。

「ちよつと、比企谷君。どこ見てるのかな？」

「っ！すみません！」

「なにになに？お姉さんの色気に早速やられたわけ？」

「…すみません」

「あはは！赤くなっちゃってかわいいの！」

「くっ…」

なにこの公開処刑。なんかしれつと俺の隣に座るしやたらとこっちじろじろ見てくるし良い香りだし俺の精神力がごりごり削られるんだけど。

落ち着け俺。もう社会人だろ？こんなときこそ冷静に会話をするんだ。

「そ、それで今日はどのようなご用でゆえ？」

「あはははは！声上ずってるよー！」

…穴があつたら入りたい。

てか何もう。そういうのはですね、気付いても言わないのがマナーだろうが。なんで俺に恥ずかしい思いを上書きさせるのこの人。

「…それで何の用ですか」

「いやね？同じ事務所に共演者が居るって聞いたから挨拶しようかなって」

「それはどうも」

笑いすぎで涙出てるじゃん。どんだけ受けたんだよくそ。もおやだ八幡お家帰る。今日はもう帰るもん。

「もお、拗ねないですよ。笑いすぎたのは謝るからさ」

「…別に拗ねてないです」

「じゃあもう一回自己紹介のやり直しね？あたしは片桐早苗。このアイドル部門に所属しているアイドルよ。ちなみに前職は警察官。よろしく！」

本物の警察だった人がドラマで警察を演じるのか。この活発な性格もありたしかに完璧な配役だな。

「俺は比企谷八幡、19歳です。前職とかは無くて今は普通に大学に通いながらここで働いています」

「ええ!?19歳!?わっか！菜々ちゃん聞いた？19歳だって！羨ましいわね！」

「なんでここで菜々に振るんですか！菜々は17歳のJKなんですよ!?!」

たまたま近くに居た安部さんへまさかの流れ弾。二人は中が良いのだろうか。きつと飲み仲間とかそんな感じかな。

なんか安部さん俺の事睨んでるんだけど。これは俺悪くないよな？

「菜々ちゃん、アイスコーヒーよろしく」

「かしこまりました」

ムスっとした顔で厨房に戻る安部さん、とても〇〇歳とは思えない可愛さだ。

片桐さんといいこのアイドルは年齢が本当に分からない。

「…」

なにやら早苗さんがこつちを見つめてくるんですが。そんな熱烈な視線を贈られたら勘違いして告白して振られちゃう。

「どうかしました?」

「いやね、比企谷君さ、今回の配役ぴったりだよね」

「そうですか?」

「うん。冊子で内容を確認したけどイメージ通りよ」

「それだったら片桐さんもかなりイメージ通りですよ」

「確かにね! まるであたし達の為のドラマよね!」

「片桐さんは役作りとか少し楽そうですね」

「そうね! あたしなんてそのままのあたしでオツケーよ!」

「:俺は体鍛えなきやならないんですが」

「ずいぶんと嫌そうですね」

「嫌に決まってるじゃないですか」

頭脳派とはいえ一応警察官。アクションシーンもそこそこあるという事なので体を作らなくてはならない。部長から渡されたスケジュールにも撮影開始までの間に筋トレの時間が多く存在していた。

このドラマで一番嫌な所だな: 何故俳優なのに鍛えなきやならんのだよ。てか俺がマツチヨになってどこに需要があるですかね。

「なら体作り、お姉さんが手伝ってあげるわ」

「え?」

「どれどれ…」

「ちよつ!」

近い近い髪サラサラ良い匂い近い!

なに俺の腕揉み揉みしてんですか? そう言うボディタッチをされるどころらとしては意識せざる得ないんですよ? わかってます?

って腹と足触るのも止めて!

「なにするんでしゅか！」

「なるほどなるほど」

「なるほどって」

「流石若いだけあって下地はそこそこあるわね」

「何の話ですか!？」

「明日からがんばろうね!」

「ちよ、何勝手に「比企谷さん…?」

「た、高森さん!？」

後ろを振り替えるとそこには見慣れぬ紙袋を持っている高森さんが頬を赤く染め立っていた。

これはもしや勘違いしていらっしやるのでは？

「早苗さんと何してるんですか…?」

「いやこれは「あーあ!見られちゃったか」

片桐さんは悪戯な笑みを浮かべ肩を組んできた。

だから近いんですよあなたは!当たってるって!

「実はあかし達はこーゆー関係だったの」

「え?え?そうだったんですか?」

「うふふ、まーねー」

「えつと…おめでとうございます?」

高森さんはまだ脳が追い付いていないようだ。目がぐるぐるしてて可愛い。

「はあ…もう良いでしょう?」

「うーん…お姉さんはもう少しやりたかったかな」

「これ以上は俺の精神も削られるんでやめてください」

「はいはい」

「えつと…どういうことですか?」

「高森さんが思ってるような事はない」

「あたしが比企谷君のボディチェックをしてただけよ」

「ボディチェック?」

「実はね…」

ドラマ共演の事から説明を始める片桐さん。

その間俺は暇なのでとりあえず安部さんに高森さんの為のレモンティーを注文しておくか…。

「安部さん、レモンティーとコーヒーを一つ下さい。コーヒーは砂糖とガムシロ5つ入れて」

「かしこまりました！レモンティーとブラックコーヒーですね」

反論する間も無く安部さんは厨房へ戻っていった。

ちよつと待って。俺砂糖入れてって言ったよね？あれ以来まじで安部さんは俺に激甘コーヒを淹れてくれない。

ほんと世の中は苦いよ。

「と言うわけで今度から一緒に体を鍛えるってわけ！その前に体を確認をしてたのよ！」

「そう言うことだったんですね」

ひとしきり説明も終わったようだ。

てか一緒に体を鍛えるのは確定なんですね。俺承諾もしてないんだけど。やっぱり世の中は苦い

「ドラマのお仕事、頑張ってください！」

「最近の藍子ちゃんも頑張ってるしあたしも負けてられないからね！」

…うん。こういうアイドル同士の会話って良いな。可愛い女の子が話しているのを見てるだけで癒される。俺の所属してる部署は色物俳優が集まる所だから華やかさは正直ない。

てかやっぱ俺も色物なんだよな…まあ別に良いけどね。

「そういえば藍子ちゃん。その袋何？」

「あつ！そうでした！比企谷さん！」

「ん？」

「誕生日おめでとうございます！」

「え？」

誕生日？誰の？俺の？

スマホを確認すると日付が8月8日を指していた。

「…忘れてた」

「やっぱり、比企谷さんはそうだと思います」

「それでその紙袋は比企谷君へのプレゼントってわけね」

「はい！どうぞ」

「あ、ありがとう」

誕生日を家族以外に祝われるのは…なんかこう、むず痒い。

高校の時から祝われる事はあったが中々なれないものだ。

「ね、ね！開けてみてよ」

「あー、高森さん、開けてみて良いか？」

「はい！どうぞ」

「これは…帽子？」

黒色キャップ帽で何か分からないロゴがワンポイントで付いている。派手すぎず地味すぎない絶妙なデザインだ。

「はい！比企谷さん変装の帽子被らないから持ってないのかなって思ってた」

「かつこいい帽子じゃない！被ってみなさいよ」

「…どうですか？」

「かつこいいです！」

「似合ってるわよ」

高森さんは嬉しそうに、片桐さんはにやにやとしながら感想を述べる。

何と言うか本当に、居たたまれないというかむず痒い。

にやにやしてる片桐さんと暖かい目で遠くから見てる安部さんがもうね、止めてくださいほんと。

「高森さん、ありがとな」

「はい。気に入ってもらえてよかったです」

高森さんの微笑み、眩しすぎる。

目の前の女の子可愛すぎ大問題です。

緊急集合！…ボツチなので集合かけても誰も集まらないか。

「良いな…青春で感じで」

「青春で…俺もう成人したんですよ？」

「二十歳なんてまだまだ青春真っ只中よ！」

「そんなもんですか…」

8年でそんなに変わるのか…この先の老いが少し恐ろしくなってきた…。今度安部さんにそこんとこ詳しく聞いてみよう。

「誕生日、あたしも何か…っ！そうだ！比企谷君！」

「なんですか？」

「今夜予定ある？」

「家で休む予定です」

「なら今夜開けといてね！」

ちよつと…俺の予定無視されたんだけど。個人的に休むのを立派な予定だと思っうんですよね。

「何するんですか…？」

「大人の誕生日と言えばこれに決まってるじゃない」

クイツと口の前で手を動かす。

あつ、これはもしやあれか。

「いいなー。私も行きたいです」

「あと5年後ねー」

「俺も行きたかったです」

「あんたは来るのよ」

「ですよー」。

酒とかまともに飲んだことないぞ…。

「実は今夜あたしのドラマ主演決定祝いで飲み会の予定だったのよ！比企谷君も参加ね！」

「…分かりました」

「よし！じゃああたしはそろそろ仕事に戻るわね！仕事終わったら迎えにいくから！」

「了解です」

「じゃまたねー」

片桐さんはコーヒーのお金を置いていくとひらひらと手を振りながらエレベーターに向かっていった。

なんていうか…嵐の様な人だったな。

「俺もそろそろオフィスに戻るけど高森さんはどうする？」

「私も戻ります」

「そうか。じゃあ行こうぜ」

「はい」

会計を済ませ二人でエレベーターに乗り込み別々の階のボタンを押す。

「じゃあ比企谷さん、楽しんできてくださいね」

「はいよ。またな」

高森さんと別れ自分のデスクに向き合うとまだ確認していないバラエティー番組の台本が数冊ころがっていた。

取り合えず5時までに全部の仕事終わらせるか…。

今日は何時に帰れるんだろう。まさか日を跨がないよね？

若干の不安が残るなかパソコンに向き合って仕事を再開した。

5話

風も吹かない夏の夜は残り少ない俺の体力を容赦無く奪い去るような蒸し暑さだ。

額から汗が吹き出しながらも俺は目の前を歩く女性の後ろを歩いていた。

「あの…まだですか」

「もう少ししょー」

片桐さんが行きつけの居酒屋があるとかで現在向かっている。なんでも味もお酒も中々なのだが駅から離れているため客の入りがなく、個室もあるため芸能人がこっそりと飲み会をするには最適な所だそう。

てかさつきからずっともう少しって聞いている気がするんだが。事務所から近いって言ったくせにもうかなり歩いている気がする。

もおやだー。駅から俺の家からもどんどん遠ざかっているし帰るのも大変そうなんです。

「ほらーあそこよー」

「…あそこですか」

暗い郊外のなかにぽつんと一軒、赤いのれんと提灯をぶら下げた建物一つ。それは異質でありながら周りの景色に馴染んでおり違和感を感じることは無かった。

「へえ」

「中々良さそうな所でしょ？」

「そうですね」

「もう入ってる人も居るし行きましょう」

「はい」

のれんを潜ると正に下町の居酒屋といった感じの和式テーブルやカウンターがあった。

未成年が考える居酒屋と言えはこうつ、といった内装だ。

酒には興味があまりないのだがこういう所に来ると何だかドキドキしてくる。俺も大人になったのだと感じる。

「いらっしやいませ！」

「こんばんは！皆もう来てる？」

「はい！奥の個室へどうぞ！」

バイトと思われる女性の案内で奥の個室へ向かうと六人掛けの座敷に二人の美女が座っていた。

「楓ちゃん！瑞樹ちゃん！おまたせ！」

「早苗ちゃん遅いわよー」

「ごめんごめん」

「それと：そちらの方が比企谷八幡君ね」

「ど、どうもはじめまして。比企谷八幡でしゅ」

「また噛んでる」

「ふふ：私は川島瑞樹よ。よろしく」

「高垣楓です。よろしくおねがいます」

「よろしくおねがいます」

二人とも俺ですら知ってる。美城プロが誇るトップアイドルだ。すげえスラツとしててなんつーか凄い。艶やかな雰囲気凄い。

「ほら！ぼーっとしてないで早く座りなさい」

「あっはい」

やばいやばい見とれてしまっていた。

俺の隣は片桐さん、川島さんと高垣さんは向かい合う形で座った。

このテーブル凄い。美人多すぎだろ。

座銀でそういうお店入ったらいったいいくらになるのかしら。

「それにしても比企谷君ってイメージ通りね」

「そうですか？」

「ええ。私もあの映画見たけどはまり役よね」

「二作目も是非見てくださいね」

ちよつと川島さん。美人がそんなに見つめないでさいよ。緊張で口の中からっからなんです。

「そう言えばあとどれくらい人来るんですか？」

ここに入ってからまだ注文する素振りもないところを見るとまだ誰か来るのだろう。

「あと一人よ。もうすぐ来るはずだけど…」

『いらつしやいませ!』

「お、噂をしたら来たみたいね」

いらつしやいませだけで断定とは…他のお客さんって選択肢は無いのかよ。ここのお店経営大丈夫かしら。

「おまたせしました」

個室のドアが開けられやたらと低い声が聞こえた。

そこには強面で推定2メートルの大男立っていた。

…でかくない？

「ほんと遅いわよ!とりあえずビールで武内君も良いかしら?」

「はい」

片桐さんが注文をし始めるとその大男はこちらをじつと見ると歩み寄ってくる。

えっ…ちよつ怖いんだけど。

た、助けて小町!

「はじめまして。私は美城プロダクションでプロデューサーを勤めております」

そういうと名刺を差し出してきた。

怖かったわ。ただの名刺交換かよ。

えっと…武内さん…て言うか。

「すみません。今名刺持つてなくて…僕は比企谷八幡っていいいます。美城で俳優やってます」

「存じ上げてます。今後ご一緒することがありましたらよろしくおねがいします」

「こちらこそ」

なにこの人めちやくちやしつかりしてるじゃん。でもこの敬語が顔がにこりともしない事も相まってやたらと怖いけど。

失礼しますと武内さんは高垣さんの隣に座りビールも来たことでやっと飲み会が始まるようだ。

「それじゃあ皆!今日は早苗ちゃんと比企谷君のドラマ出演を祝つて、乾杯!」

『乾杯!』

うえ…これがビール…苦いし不味い。

「ぷはー! やっぱりビールは美味しいわ!」

「今日は熱かったから余計に美味しいわね」

一気にジョッキの4分の3を飲み干すアイドル一同。武内さんは少し飲んだだけのようだ。

一方俺は恐ろしいのでちびっと一口飲んだだけ。

うえ…まずい。よくこんなもの飲めるな…。

「これ不味いですよ」

「違うわよ比企谷君! ビールってのはね! 味わずに一気にいくの!」

「い、一気すか?」

「ほら、ガバツとよガバツと!」

まじかよ…ええい、ままよ!

ぐいっと運動後の水を飲むように喉に流し込む。

「ぷはっ」

「どうよ?」

「…確かに少し良いです」

「でしよー!」

気が付いたらジョッキを空にしてしまうほど飲んでた。喉乾いてたし気持ちが良いものは仕方無い。

「比企谷君、結構行けるじゃない」

「喉乾いてましたから」

「次はどうする?」

「甘いとか無いですか?」

「じゃあ無難にチューハイね。大学生に人気だし飲みやすいわよ」

「じゃあそれで」

「すみませーん! レモンサワーとビール追加で!」

「私は芋をおねがい」

「私は冷酒をおねがいます」

アイドルのお姉さま方流石にお早いですね。

ちなみに武内さんはまだ半分くらい残っている。

何だか少し頭がふわふわしてきた。酔いが回るってこんな感じか。「そういえばプロデューサー、少し遅かったみたいですけどどうしたんですか?」

「実は警察の方に…」

「またなのね」

「職質ですか?」

「はい。こんな見た目ですから多くて」

「…俺も気持ち分かります」

「比企谷さん…」

武内さんはなんとも言えない表情でこちらを見てくる。

俺も職質常連だからな。なにもしてないのに話しかけてきやがって無駄な時間取られんだよほんと。

何だか腹が立ってきた。

「あれ酷いですよねほんと」

「まあ警察の方もそれが仕事ですし」

「だとしても俺たちなにもしてないのに足止めくらって…こっちの気持ちも考えてほしいです」

「でも仕方無いわよー。お姉さんでも君たち二人を見かけたら声かけちゃうもん」

けらけらと笑う片桐さんが何だか憎たらしくなってきた。まじギルテイ。

「武内さん」

「はい」

「俺たちずっとこのままなんですかね」

「気を落とさないで下さい」

「ありがとうございます」

武内さんまじ優しい。高身長だしイケメンだな。

「これからもこういった事はあると思いますが頑張りますよ」
「はい」

二人で固い握手を結び未来へ向けて意気込む。

なんだか不思議な友情が芽生えた気がする。

「これが仲間か…。」

「なにになに？二人つてもしかしてこつちななの？」

「ち、ちがいますよ」

「怪しいなあ…」

川島さんもしかしくなくても酔ってるな…。すでに焼酎3杯飲んでるし。片桐さんに至ってはジョッキ5杯目だ。

「比企谷君は女の子にもちゃんと興味あるわよう」

「ほんとにー？」

「ほんとほんと。証拠見してあげるから瑞樹ちゃん比企谷君の隣に来て」

「わかったわー！」

ちよ、なぜそうなる。謎な席替えにより俺は片桐さんと川島さんに挟まれてしまった。

「ひーきがーや君ー！」

腕にむにゅつとした感覚が…。

「つてなにしてんすか片桐さん！」

「ほーら顔真っ赤になった！真っ赤になった！」

「ほんとねえ…」

「ちよ近い近い良い香り近い！」

「照れちやつてかわいいのー！」

「さすが二十歳！初ね！」

「そろそろやめてくださいやい」

「あははは！噛んだ噛んだ！」

「くう…なんなんだこの酔っぱらい」

「からかいがいあるのよこの子。瑞樹ちゃんもやってみる？」

「そうねえ」

「川島さんは…そんなことしないですよね？」

これ以上はいけない。俺の精神衛生上よろしくない。

「ちよ、川島さん!？」

どんどん顔近くなるんですが。片桐さんとちがった良い臭いがまた…。

「ふう」

「うへえ…」

耳は、耳はだめですよ。

「うへえつて！うへえつて！」

「あははは！かわいい！」

「…」

「あれ？拗ねちゃった？」

「拗ねてないです」

「なによー？こんな綺麗なお姉さんたちに囲まれて本当は嬉しいくせに」

「それについてはなんとというかご馳走さまです」

「あははは！お酒飲むとずいぶん素直ね！」

「ほんとかわいいわね」

「ね！からかいがあるでしょ！」

「わかるわ！」

「…」

「まーた拗ねてる？」

「拗ねてないです」

「そんな分かりやすい膨れっ面でなにいつてんのよ」

さすがにからかいすぎだ。俺の僅かにあるプライドに触れたぞ。

「美人に俺は慣れてないんですか取り乱すのは当たり前なんです」

「なにになに？デレてるの？」

「ああもう、うるさいな」

「確かにからかいすぎたかもね」

態度が一転、急にしおらしくなる川島さん。

「本当にそうです」

「やりすぎやった。ごめんね？」

「…」

「瑞樹さんも謝ってるし許してあげましょう？」

にっこにっこと日本酒を飲んでいた高垣さんもなぜかここで介入してきた。

「反省したわ。許してくれる?」

「許してあげましょう?」

なんとというか…高垣さんと川島さんの声を聞くと心が落ち着くと
言うか…安心する。

「比企谷君…おねがい」

きつとこの二人にはこの先も敵わないだろう。

「…もう良いですよ」

「…」

「?」

「かわいい」

「見た見た? 膨れっ面にそっぽ向いてもう良いですよっだって! 完全に子供のそれよね!」

「二十歳って言うより比企谷君が初よね!」

俺を挟み二人けたけた笑いながらで大盛り上がり。

「仲直りしてお酒で皆しゅあわせ」

高垣さんはなんか駄洒落言つてにこにこしてるし。

あの二人最初はクールなお姉さんだったのに今は見る影もない。

「比企谷君! その顔写真とって良い?」

「みじゆきと初な者同士でツーショット撮りましょ!」

「比企谷君はあつかんはアカンでしたか?」

「…」

もうやだこの酔っぱらい達…。

6話

あれからそこそこの時間が経ちお姉さま方の興味が俺からそれ、現在は最近の新人アイドルについてで盛り上がっている様子。

「新しいプロジェクトですか?」

「はい。来年の春を目指して現在準備中です」

プロデューサーとはどのような仕事をしているのか少し興味があつたためこの武内さんに何を今どんな事をしているのか聞いて所
どうやら今大変な時期らしい。

「プロジェクトってどんなプロジェクトなんですか」

「笑顔です」

「笑顔ですか…」

「…」

「えっ…それだけ?」

「それだけです」

「新しいプロジェクトって結構大きいんですよ」

「はい」

「そのコンセプトが笑顔だけって…それで大丈夫なんですか」

そんなんで企画が通るとは思えないんだが…。

「比企谷さんはトップアイドルになるのに必要なものとは何だと思
いますか?」

「トップアイドルですか?」

「はい」

「やっぱり…見た目が良かったり歌やダンスが上手かったり…あと
トーク力があることですかね」

「確かにそれらはアイドルにとって大切な要因だと思います。しかし
見た目だけならモデルの方がいます。歌なら歌手、ダンスならダン
サー、トーク力なら芸人の方々が上でしょう。アイドルが担わな
くても問題無い分野です」

「確かにそうかもしれないですね」

「実際に歌も躍りも上手くて容姿も整った方を多く見てきましたけどそ

の全てがブレイクしたわけではありません」

「じゃあアイドルに必要なのはいったい」

「笑顔です」

「笑顔…」

「彼女達の魅力は具体的に評価できるものではありません。踊っている所をただ見ているだけで胸が熱くなる…応援したくなる、カリスマ性とでも言うのでしょうか。それこそが大切なんです」

「それで笑顔ですか」

「笑顔ひとつで周りの人間が幸せになる、これこそアイドルの究極形だと私は考えています」

「なるほど…なんとなく理解はしました。でもやっぱりピンと来ないですね」

「比企谷さんはアイドルのライブを生で見ることがないですか？」

「無いですね。俺は人混みが苦手なんで」

「是非行ってみてください。あなたならきつと分かるはずです」

「そんなものですか」

『杯を乾すと書いて乾杯と読む！乾杯！』

『乾杯！』

「…」

「…」

「本当にあの人たちがカリスマ性あるですか？」

「ステージに立つと…凄いです」

どこぞのダイビングサークルみたいな乾杯してますが。

「なにになに？お姉さんたちの話？」

「何でもありませんよ、ほらあっちに戻って」

「この扱い！今日初めて会ったばかりなのに！」

「そんな絡まれたらこうなりますよ」

「絡まれるってセクハラかしら!?!比企谷君は変態ね！」

「うぜえ…」

この人ほんとに元警官かよ。

「それはそうと二人は何か動物か飼ってる？」

「私は飼ってないですね」

「俺は実家で猫飼ってますよ」

「猫！タイミングバッチリね！瑞樹ちゃん！比企谷君猫飼ってるって」

川島さんがなにやら目を輝かせて向かってくる。

本当に最初のクールなオーラは完全に消え去ってるな。

「猫ってどう？かわいい？」

「うちの猫無愛想ですよ。あいつ俺になつかないですし」

「本当に？」

「はい。俺がソファで寝てるとわざわざ俺の上に乗って寝るんですよ？」

「猫が寝転ぶわけですね」

「可愛いじゃないそれ！」

「ありあ俺を湯タンポ代わりにしてるだけです」

「でもなんか癒されるわね」

「比企谷君写真とか無いの？」

「無いです」

「ええ！見たかったな」

「無いものは無いですし」

「残念ね…」

「…」

川島さんの声でそんな残念がられると何か心に来るものがある。何故かは分からないけど何とかしてあげたくなるんだが。

「あー、妹は実家に居ますし写真撮って送ってもらえるかもしれないですね」

「比企谷君妹いたのね」

「はい。世界一かわいい妹がいます」

小町は千葉二大天使の一人だ。ちなみにもう一人は戸塚。異論は認めん。

「シスコン？」

「妹が芋を売っとります」

「じゃあ比企谷君、お願いしていい？」

「はい、ちよつと待ってください」

高垣さんのギャグは皆さんスルーなんですね。誰も反応しないのになんであの人あんなに楽しそうなんだろうか。

俺はプライベート用のケータイを取り出し電話帳から小町を探す。

さすが俺の電話帳。数が少ないからすぐ見つかるぜ。

コールを5回くらいした後に小町が出た。

『もしもし、どしたのお兄ちゃん』

「おお、実は頼みがあつてな」

『なに？』

「カマクラの写真送つてくれない？」

『カーくんの？なんで？』

「いや：写真みたいって人居るから」

『てかお兄ちゃんカーくんの写真持つてないの？』

「ああ」

『えー！家族愛が足りないよお兄ちゃん！』

「小町のなら沢山あるんだが」

『それポイント低いどころかマイナスだよ』

俺的ポイント高いと思つたんだが…

「どう比企谷君、写真撮れそう？」

「たぶん行けますちよつと待ってください」

『お兄ちゃん！今女の人の声聞こえたよ！？誰！？結衣さん！？』

「うるせえ：同じ会社の人だよ」

『その人可愛い！？てかこんな時間に二人で何してるの！？』

「二人じゃねえよ…」

何かスイッチ入ったんだけど…こうなると小町はめんどくさいんだよな…。

「比企谷君、私に貸してケータイもらえる？妹さん私に興味津々みただし」

「いや、でも…」

「私も世界一かわいい妹さんが気になるの。いいから貸して…もしも

し、こんばんは川島瑞樹です」

なかば強引に奪われた携帯から小町の興奮した声が漏れてくる。確かにこれは聞こえるな。

「そうね、あら？ありがとう。ええ、そうよ」

「いいなー。あたしも比企谷君の世界一かわいい妹と話したい」

「妹じゃなくて猫を見たいんじゃないんですか」

「皆とお話出来るようにスピーカーモードにするわね。あと小町ちゃんの顔も気になるからビデオ通話にするわよ」

「ちよ、なんでそんなことする必要が？」

『皆さんこんばんは！その愚兄がいつもお世話になってます！妹の比企谷小町です！』

「あたし片桐早苗よ！」

「高垣楓です」

『わあー！皆さんのこと知ってます！小町驚きです！』

「あら、ありがとうね」

『楓さんもすごい美人だし、早苗さんはすごいセクシー！』

向こう側で俺の奪われたケータイを囲いお姉さま方はまた盛り上がっている様子です。

「武内さん…俺のケータイ取り返してきてくれませんか？」

「申し訳ありません。ああなた彼女達相手では、おそらく無理です」
「ですよね…」

まあ別に良いんだけどね。何か俺に不利益があるわけでも無いし。小町もわざわざ俺のバカみたいな話はしないだろう。

それにしてもなんでこうなった。本当になんでこうなったんだ。

「比企谷君！あなたの妹可愛いじゃない！」

「だからそう言ったでしょう」

「てつきり可愛い藍子ちゃんの事かと思ったわよ」

「そんなわけ無いでしょう」

「普段から藍子ちゃんにお兄ちゃんって呼ばせてるらしいしそうだと
思っただのよ」

『ええ!?お兄ちゃん今のどういこと!?アイドルの藍子ちゃんどう

『関係なの!?!』

「呼ばせてないしどんな関係でもない!」

「いったい何故そのようなガセ情報が出たんだ。

」でも菜々ちゃんのカフェでそう呼ばれてたって」

安部さんめ…いつかテレビでゴールド免許の下りを話してやる。

「高森さんがからかってそう呼んだだけですよ」

『本当にそれだけ?』

「うるせえなもう。さっさとカマクラ見せろよ」

『あつ、そうだった。よいしょつと』

「わあ、可愛いじゃない!」

『どうも、カーくんです』

小町は足元からカマクラを抱き抱え前足を手を振るように揺らす。

「かわいいわね!」

「そうですね。小町が可愛い」

「シスコンは犯罪よ」

えっ…シスコンって犯罪なの?

もし仮にそうなら千葉県の兄妹は皆検挙されてしまう。

『お兄ちゃんまたしようもないこと考えてるでしょ』

「うるせえ…。猫も見たしもう切りますよ?」

強引にケータイを取り戻しビデオモードとスピーカーモードを切る。

『えー…もうおしまい?』

「ああ。付き合わせて悪いな。ありがとさん」

『はいはい。じゃあねー』

やっと切れた…。なんつーかこう仕事繋がりの人に家族を見られるのは恥ずかしいものがあるからな。正直精神的に疲れた。

「小町ちゃん本当に可愛かったですな」

「ええ。私もあんな妹が欲しいわ」

「絶対にあげませんからね。俺の世界一可愛い妹は」

仮に小町が結婚するなんて事になったら俺は何をするか分からない。泣きわめいて一ヶ月仕事を休むだろう。

「それより川島さん。猫ですよ猫」

「猫も可愛かったわね…どうしようかしら」

「…飼うんですか？」

「うーん！悩むわ！」

「…ペット飼うと婚期が遅れるらしいですよ」

「そうなのよ！それがネックね！」

「実はあたしも猫ほしいのよね…」

「片桐さんもですか」

「ええ…最近家に一人でいるのが寂しくてね」

「わかるわ…」

「高校の友達なんかもほとんど結婚してて…SNSでも旦那や子供の写真とか投稿してるの。それ見たあと自分の部屋を見ると…寂しくて」

「わかるわ、わかるわ！」

「ペットか旦那が…ほしいのよ」

「お二人なら引く手あまたなんじゃないですか？」

「それがアイドルに手出ししようとする人って案外いないのよ」

「全国のファンを敵に回す度胸がないのよ」

「そんなもんですかね」

「楓ちゃんもぼちぼち気を付けた方がいいわよ？」

「そうですね、私が婚期を逃したら…プロデューサーに責任を取ってもらいましょうか」

「えっ…私ですか？」

「ええ」

「それいいわねー！ならお姉さんは比企谷君に面倒見てもらおうかしらー！」

「ずるい！私も私も！」

「何いってんですか」

「いやでも比企谷君ってよく考えたら良い物件よね。現状そこそこの稼いでるし、顔も目以外は整ってる。それに通ってる大学って〇〇大学でしょ？」

「○○大学!?結構名門じゃない!」

「しかも結婚したら可愛い小町ちゃんが義妹になるわけでしょ?」

「たしかに…比企谷君」

「なんですか川島さん」

「君の左薬指…予約しても良いかしら?」

「良い訳無いでしょう」

「じゃああたしは?」

「お断りします」

「なによ!こんな美人なのに何が不満なのよ!」

「そーよそーよ!」

「めんどくせえ…」

わいのわいのとやかましい。本当にこの人たち歳上なのか?

「皆さんかなり酔われてますね。そろそろお開きにしましょうか」

武内さんの大人な対応がすごい。

俺が言いたくても言い出せないことを平然と言つてのける!そこにしびれる憧れるう!

「そんなことないですよ。おちよこにちよこつと、飲んだだけですよ」

「徳利がちよこつとレベルじゃないくらい転がってますよ」

「あたしもまだまだこれからよ!」

「わからないわ」

「お二人とも明日午前から仕事ありますよね」

お姉さま方をなんとかなだめお会計をすませる。これが敏腕プロ

デューサーの腕前…!

「片桐さん。今日のご馳走さまでした」

「いーのいーの!また飲みましょう!」

「次は友紀ちゃんも一緒に飲みたいですね」

「あと菜々ちゃんもね!」

今よりお姉さまが増える…だと?

何て恐ろしい。これでマックスパワーではないのか。

フルメンバーの飲み会はどれほどカオスなのか、想像したくもない。

「皆さんタクシーが来ましたのでどうぞ」

「はいはいじゃあまたねー」

「お疲れ様でした」

お姉さま方はタクシーに乗って帰っていった。

「比企谷さんもタクシーで帰られますか？」

「あー、そうですね。家まで遠いですしタクシーで帰ります」

「分かりました。今呼びますんで待っていてください」

「ありがとうございます」

流石に酔いが回ってふらふらする。歩いて帰れるかわからない。初めて酒飲むっていうのにあの人たちがどんどん飲ませるからな…。「すぐに来るそうです」

「分かりました。武内さんは歩きですか？」

「はい。ここから遠くないので酔い冷ましも兼ねて歩いて帰ります」

酔いざましか…なるほどそういうのもあるのか。

「おっ、タクシー来ましたね」

「そうですね」

「今日はありがとうございます。新プロジェクト頑張ってください」

「そちらもドラマ、期待しています」

「じゃあまた」

「はい」

ボタンとタクシーのドアを閉め社内の涼しい空気に触れる。

「○○のコンビニまでお願いします」

「○○ですね。かしこまりました」

行き先を告げるとタクシーはゆっくりと発進する。

ああ…なんだか疲れたな。明日は休みだしゆっくりと眠ろう。

心地の良い冷風を浴びながらタクシーに揺られ自宅までの道のりをゆっくりと進んでいった。

7話

まだまだ残暑が辛い九月中旬、昼休みに俺は我が大学のキャンパスを歩いていたのだが…

「比企谷君！比企谷君だ！」

「本物の比企谷八幡だ！サインください！」

これである。俺の周りには普段誰も寄らないのだが今日は違いうらしい。

やはり八月が原因だろう。

八月中頃、俺の出演する映画が公開し、わずか三日で動員数100万人を突破した。客層は主に若い世代で兄妹の愛と切ないすれ違いに必ずあなたは涙する…らしい。

そんな大ヒットを受け俺の知名度はさらにはね上がった。それに伴い番宣を兼ねたバラエティー出演のオファーが殺到、スケジュール帳は予定でびっしりになった。

まじで勘弁してくれよ…。最近筋トレもしてるんだけど俺。こんなに働いてたらそろそろまじでアイデンティティーが壊れる。

そんな事を常に考え不満が積もったり限界に達した結果、俺は盛大にやらかした。

番組前のアンケート。

これが俺の芸能生活を大きく変えてしまった。

いつもは猫を被って趣味は読書（嘘はついていない）とか書いていたのだがその日だけは俺の考えを正直に書いてしまったのだ。

将来の夢、専業主夫

座右の銘、押してだめならあきらめろ

最悪なことにこのアンケートはベテラン芸人七人としやべる番組で書いてしまったのだ。どうなったのかはご想像のとおり散々突っ込まれ根掘り葉掘り色々聞かれてしまった。

アンケートは勢いでやった。後悔しかしてない。

その番組がつい先日放送された。

イメージ通り過ぎる捻くれぼっち俳優として俺は世間に知れ渡っ

てしまった。

それでこの様である。

有名になった途端サイン攻めとかこのスクールアイドルよ。もう家までランナウェイしたい。

なんとかサイン攻めから逃げ出し、大学でのベストプレイスへ避難した。ここで変装を戻して：よし。これならもう誰にも気づかれんだろ。これで安心して昼飯を食える。

大学でのベストプレイス。それは精密加工室がある研究棟の裏階段。裏階段はキャンパスの隅にあり朝に清掃員の人を利用するだけで他には誰も使わない。高校の頃と同じくそこから近くにあるテニスコートを眺めることが出来るのだが戸塚は別の大学へ進学したため天使の舞はもう見る事が出来ない。

戸塚：会いたいよ戸塚あ。あのエンジェルスマイルで俺の荒んだ心を癒してほしい。

「戸塚あ」

「なに気持ち悪い声出してるんですか」

「!？」

突然現れたベストプレイスに踏み入れる影…

ゆらりゆらりと近づいてくるその正体は!？」

「こんにちは先輩！お久し振りです！」

一色さんでした。

「なんだお前か」

「なんですか？いきなりお前呼びとか私の旦那気取りですか私まだ結婚とか考えられないんでごめんなさい無理です」

またよく分からんがフラれたんですけど。高校時代からフラれすぎて世界一フラれた男の称号をもらえるまでである。

「それでなにしに来たんだよ」

「今話題の男優さんにサインを貰いに来ました♪」

「おいお前までやめろ、やめてくださいお願いします」

「冗談ですよ」

気心許した身内にまでそんなことを言われたら俺の心に平穩は訪

れない。俺は平穩がほしい…どこぞの爆破魔のように植物の心ような人生を…。

「で、本当に何の用だよ」

「先輩の様子を見に来たんですよ」

「は？俺の様子？」

「だって先輩夏休み仕事仕事で全然私たちに付き合ってくれなかったじゃないですか」

「まあ…そうだな」

「私も先輩をりよ…お願いしたいこともあつたんですよ？」

ちよつと一色さん？今利用とか言いかけたよね？

「そりや悪かつたな」

「そうです。先輩が悪いんですからね」

「ハイハイ分かったよ」

「むう…本当に悪かつたと思つてますか？」

いちいちしぐさが本当にあざとい。なんなのそのやわらかそうなほっぺ。ぺこちゃんなの？ママの味なの？

「思つてる思つてる」

「なら今日の放課後は私に付き合ってください！」

「わり、仕事だわ」

「もお！早速それですか！」

ポカポカという効果音がでそうな拳で俺をたたく一色まじあざとい。

見た目は可愛らしいがたまに手首のスナップを効かせた神心会空手のような一撃がくるんだよな…。

「いてて、仕方ないだろ」

「まあそうですけど…仕事ってどこでやるんですか？」

「今日は事務所だな」

収録が無いため台本の確認と筋トレが今日の予定だ。

「事務所…そうだ！先輩！」

良いことひらめいたって顔をするがこの顔をするときは大抵俺にとつて録なことにならない。

このにやけ面まじデビル。エンジェルスマイル戸塚を見習え戸塚を。

「なんだよ…」

「先輩にお願ひがあるんですけどお」

あざとく上目使いか…だがあまい俺には通用せんわ！

「断る」

「先輩にお願ひがあるんですけどお」

「嫌だ」

「先輩にお願ひがあるんですけどお」

ふえええ、ループに入っちゃったよお。

目が笑ってないし怖いよお。

「…なんだよ」

「私！先輩の事務所見学してみたいです！」

「ここが先輩の事務所ですか」

ほえ…と、素で間抜けな声を出し関心する一色。

あの後一色にどうしてもとせがまられたので断られるを願ひ部長に連絡してみたところ、快く見学を許された。

普通に一般人向けの見学会とかもあるらしく機密書類が保管されている部屋以外は概ね入室可能だそうだ。

絶対にダメだと思ったのに…。

「テレビとかで知ってはいましたけど凄いですね」

「だろ。正直未だにここに入るのは違和感がある」

「確かに先輩にこの建物は似合わないですよね」

逆に俺に似合う建物ってなによ。またずれ荘みたいなぼろアパー
トか？

「うっせ。さっさと行くぞ」

建物の中に入って広がる内装にまた感嘆の声を漏らす一色を急がし俺のオフィスに着くと台本の確認をはじめ。

こいつに構ってたら日が暮れるからな。さっさと仕事をせねば。

「ここが先輩のオフィスですか」

「ああ」

「案外普通の事務所と変わらないんですね」

「そうだな」

「あつ！これ先輩が出てた映画のパンフレットですね！」

「それな」

「：先輩」

「あ？」

「さつきから空返事ばかりじゃないですか」

「仕事中なんだから仕方ねえだろ」

「そうですけどお：私は退屈です」

「知らん」

「あつ！そうだ！この事務所ってカフェとかあつたり凄いですよね？」

「ああ。らしいな」

「へえ：見てみたいなあ」

「他の人に迷惑かけるなよー」

「案内してくださいよ」

「や、仕事中だし」

それにならと二人で居るところを知り合いに見られたら気まずい。

「終わるまで待ちますから」

「：」

「私だけじゃ不安ですしお願いしますよ先輩」

「分かったよ：案内してやるから仕事終わるまで大人しく待ってろ」

見学させると決まったときにこうなることはある程度予想してた。流石に一色を一人で歩き回らせるわけにもいかないしな。

「ほんとですか！了解です！」

とりあえず一色に適当な小説を与え台本の読み込みを進める。片桐さんと共演するドラマの台本の確定版が先日送られて来た。内容を読む限り役作りをする必要は無さそうだ。基本的にいつもの俺で平気だろう。

まあそれを見越してのキャストイングだろうけど。

黙々と読み進めひとしきり読み終わると時計は午後四時を刺していた。

「待たせたな一色」

「終わりました？」

「ああ」

「やっとうですか！じゃあ行きましょう！」

—————

「本当にここ凄いですね」

「だろ」

一通り見学会パンフレット通りの案内を終え、いつものカフェで休憩をしている。

案内をしている時の一色はまたもや感嘆の声を漏らし凄く凄いと興奮していたがこの広い事務所を一回りしたとなるとやはり疲れてしまったようだ。

「私ここに住めますよ」

「仮眠室もシャワーもあるしな」

「エステルームとか毎日いきます！」

随分事務所が気に入ったみたいだが俺はそう思わない。

住めるという事は仕事が忙しくて帰れないときに泊まり込み可能な職場であると言える。

そんなことを考えると恐怖で震えるわ。特にプロデューサーの人

たちはまじでヤバイくらい働いてると思う。うちの会社有給消化率どれくらいなのかしら。

「そろそろ注文するか」

「そうですね」

「すみませーん」

「はい！比企谷くん…とそちらの方ははじめましてですね」

「はい。俺の一個下の後輩です」

「一色いろはです！先輩がいつもお世話になってます！」

「ウサミン星から歌って踊れる声優アイドルになるたにやって来ました！安部菜々…17歳です！」

「へえ、高校生なんだ。私より年下なんだね」

「そうです！菜々はJKですからね！」

「よくここでバイトしてるの？」

「はい。空いてる時間はよくここでお手伝いしてます！」

「学校も行ってレッスンにバイトもするなんて…菜々ちゃんって偉いんだね」

「ソ、ソシナコトナイデスヨ」

「この勤勉さを先輩も少しは見習ったほうが良いですよ」

「ソウダナ」

「もー！なんで棒読みなんですかあ？」

ぶんぶんと擬音が付きそうな怒りかたをする一色を安部さんは愕然とした目で見ている。一色のあざとさにドン引きでもしたのか？

「JDですらあんなに可愛い喋り方なんて…今時のJKはいつたいどんなしゃべり方をするの…？」

おっと、とんでもない勘違いをしていますね。

一色のあざい喋り方が今時のデフォオなわけない。こんなやつが大勢居たら世の男子学生は皆黒歴史持ちになってしまう。

「ひきがやくんのこうはいさん、とつてもかわいいですねえ」

「安部さん安部さん。JKはそんなアホっぽく喋らないですよ」

「えっそうなんですか？」

「一色はすこし特殊なんです」

「な、なるほど。でも可愛いのは事実だし…」

ぶつぶつと何やら悩み始めた安部さん。放っておくといけない方向に進みそうな気配がぶんぶんするぞ。

「あのー、お二人で何を話してるんですか？」

「注文をしてたんだ」

「その通りです！」

「へー」

「俺はいつもの。一色はどうする？」

「えつとじゃあ…私も先輩のと同じで」

「一色さん、コーヒーは砂糖とクリープ一つで大丈夫ですか？」

「はい」

「俺は八個づつでお願いします」

「かしこまりました！比企谷スペシャルブラックとパンケーキセットですね！」

相変わらず俺の要望はガン無視なんですね。一色の前で年齢ネタでいじめてやろうか。

「この事務所はカフェの店員までアイドル…本当に凄いですね」
「確かにそう考えると異常だよな」

どこの世界にウエイトレスして所属アイドルを雇う事務所があるのだろう。

「そういえば先輩ってアイドルの人とも仲が良いんですね」

「いや、そんなことないぞ」

「安部菜々ちゃんとも親しげだったし」

「それは俺がこのカフェに入り浸ってるからだ」

「本当ですか？」

「本当だよ。比企谷スペシャルという言葉出来るくらい来てる」

最近は何々オカンのせいでブラックしか飲んでないけどな。さつき安部さんも言ってたが比企谷スペシャルはコーヒーが普通ならただのパンケーキとコーヒーのセットなんだよなあ。

「比企谷君酷いですよー。菜々は友達だと思ってたのに！」

パンケーキを持ってきた安部さんはぶんぷんと先程の一色を真似

た様子で戻ってくる。〇〇歳とは思えない可愛さだがやはりきついものはきつい。

「友達って…そんなに俺たち接点ないじゃないですか」

「何言ってるんですか！もう私たちは飲み友達ですよ！」

「飲み友達？」

キョトンとした顔の一色と顔面蒼白の安部さん。

またこの人は迂闊すぎるんだよな。このあわあわと慌ててる所が可愛いとそのうち自爆芸で売れそうな気がするが。

「あれだ。俺が来たときに休憩時間だと一緒にコーヒー飲んだりすんだよ」

「そうです！それです！」

「それって飲み友達って言うんですか？」

「あー！そういうえば比企谷君は菜々よりも仲の良いアイドル要るじゃないですか！」

「ちよー！」

「やつぱり居るんですね！誰ですか！」

何この人俺を餌にして話題逸らそうとしてるの？俺フォローしようとしたのに酷くない？

「高森藍子ちゃんですよ」

「やつぱりそうですか。共演すると仲良くなるんですね」

「この前なんて比企谷君の事お兄ちゃんって呼んでましたからね」
「へえ…」

一色がゴミを見るような目をこちらに向ける。おいこらそんな目で見るなよ癖になるだろうが。

「先輩なにキモいこと考えてるんですか」

何こいつ俺の思考読めるの？俺の身の回りには読心術を習得してるやつが多すぎるんだが。

「ちよつと安部さん」

「あつーあつちで注文とらなきゃ！じゃあごゆっくりどうぞ！」

くそ！逃げやがった！一色をこうした張本人の癖に！これだから汚い大人は嫌なんだ！

「さて：色々聞かせて貰いたいですね」

「いやあれは高森さんが悪ふざけしたただけだし」

「本当ですかー?」

「ああ」

「怪しいですね：これは根掘り葉掘り話を聞かせてもらわなくちや」

「ええ：」

本当に疚しいことなんて無いのに信用してもらえない。俺ってそんな事するキャラじゃないんだけど。

「比企谷さん」

背後から俺の名を呼ぶ少女の声。それは俺がこの事務所で最も聞きなれたゆるふわ声。

飛んで火に入る夏の虫。そんな言葉が頭を過る。

「お疲れ様です」

振り替えるとそこには人気急上昇アイドルの高森藍子が微笑んでいた。

8話

あれこれ忙しくしているうちに過ぎていくもの。それが人生なんだ。

どっかの偉人がそんなことを言ってたと思う。

最近はそれを改めて実感させられる。

「高森さんおつかれ」

「お疲れ様です！そちらの方は…女優の方ですか？」

「いや、俺の大学の後輩だよ」

「へえ！私高森藍子つています！」

「一色いろはです。先輩がいつもお世話になってます」

「こちらこそ比企谷さんにはいつも助けられています」

なにこの娘俺の保護者なの？

「私もご一緒して良いですか？」

「あー、一色いいか？」

「はい！是非是非！」

「だってよ」

「ありがとうございますー！」

高森さんは席に座ると安部さんに注文を済ませる。

その間一色はと言うとにこにこしながらじつと高森さんを見つめている。

あの目は品定めをする目ですね。こいつ相変わらずだな。

「一色さんどうかしました？」

「高森さんが目の前に居るのが信じられなくて…あつ！私あの映画見ましたー！」

「そうなんですか」

「はい！とっても感動しちゃいました！」

「えへへ、ありがとうございます」

「先輩とも仲良くしてくださいってみたいでありがとうございます」

「仲良くだなんて…比企谷さんは頼りになりますからいつも助けてもらってるんです」

「そうですか…でも聞くところによるとお兄ちゃんと呼ばさせらてるみたいだと…」

ちよつと一色さん。なにいきなり聞いてくれちゃってんの？

「いえ！あれは私が悪ふざけでやってるんです！」

「そうなんですか」

そうなんです！だからその脣を見る目を今すぐやめてください！

「あつ…でも外で頭を撫でるのは恥ずかしくて慣れないですね…」

「へえ…外で頭を」

「撮影の演技だからね」

仕方ないからね？仕事だからね？だから一色さん。

脣を見る目はやめてください。

「ふーん」

「…なんだよ？」

「べつにつに？」

一色はなにやら少しご機嫌斜めになってしまった。

成人済み男性がJK触れたことを非難でもしてるのか。

あれは仕事だからね？やましいことないよ？…ないよ？

とりあえずこの会話の流れを変えねば。

「そう言えば一色、俺には映画の感想なんて言ってなかったよね？」

「映画の感想ですか？」

一色は下手くそな話題変換だと目で語ってる。今はそんなこと気にしてる場合じゃないので勿論受け流す。

一瞬間をおいた後いつもの猫なで声に戻る一色。流石だな。

「だって先輩忙しくて全然会えてなかったじゃないですか」

「それもそうか」

「先輩。言っておきますけど私先輩の出たテレビ全部見てますかね？」

「は？なんで？俺何出るとか教えてないよね？」

「なんでって冷たいですねえ。私たちの仲じゃないですかあ」

「どんな仲だよ」

身内に仕事をしてるところを見られるのはやはり恥ずかしいもの

がある。

「ちなみにあのお二人も全部チェックしてますよ」

「お前ら俺の事大好きかよ…」

「ちよつと何いつてるか分からないです」

「真顔になんなよ…冗談だろうが」

「ふふふ」

「どうした？」

「お二人とも仲が良いんですね」

「仲が良いと言うか腐れ縁だよ」

「もーなんですかそれー？」

「はいはいあざといあざとい」

「もー！酷いです」

「そうですよ比企谷さん」

「…え？」

「慕ってくれる後輩にそんな風な態度取っちゃダメですよ？」

「そ、そうだな」

「先輩先輩」

ちよいちよいと手をこまねくので顔を一色に寄せる。

「ん？なんだ？」

「高森さんつてもしかして…」

「ああ、養殖のお前と違って天然だ。しかも純度高め」

「やっぱりですか…て養殖ってなんですか！」

「耳元で叫ぶな」

「そうやって先輩は昔から」

「はいはい、わるかった」

「まったく…」

高森さんは俺たちのやり取りを見たあと手を上げてたずねてきた。

「お二人は昔からの知り合いなんですか？」

「昔からって言うか…高校生の時ですね」

「へー！比企谷さんの高校生の頃のお話聞きたいです」

「良いですよ」

「おいまで、お前なに喋るつもりだ」

「例えば私の事利用して大勢の生徒の晒し者にしたこととか、私の事唆して泣かせたとかですかね」

「比企谷さんそんなことしてたんですか」

おつと流石の高森さんも俺にじと目ですね。美少女のそういう視線、良いと思います！

「いや、言い方が悪いだけだから」

「大丈夫ですよ。変なことは喋りませんから」

俺にしか聞こえない小声で囁く一色。こいつがそう言うなら大丈夫だろう。ちゃっかりウィンクする辺りやはりあざとい。

「まず私たちが最初に出会ったのは――」

――

「その時の先輩ったら酷いんだよ！」

「確かにそれはちよつと……」

「藍子ちゃんもそう思うよねー」

あれから約一時間、気が付けばほとんど俺に対する不平不満を言う愚痴大会（ほぼ一色の愚痴）になっていた。

愚痴を本人の目の前で言うなよ。繊細な心を持つ俺は挫けちゃうよ。

「先輩も反省してください」

「はいはい」

「はいは一回！」

「はーい」

「何なんですかそれは！」

こいつやっぱりおかんなの？ままはすなの？

「本当にお二人は仲が良いですね」

「それでもないだろ。ただの腐れ縁」

「そうですね。腐れ縁ですね」

母性を感じさせる微笑みを浮かべる高森さん。そういう顔をされるとなんとにかくすぐつたい。

ふと思っただけど年下に母性を感じる俺ってやばい。そのうち小学生相手にもバブミを感じておぎやるかも。

いやさすがにないか…ないよな？

「そろそろ私は戻りますね？」

「ああ。お疲れさん。がんばって」

「お話しできて楽しかったよ！またね藍子ちゃん！」

「はい。私も楽しかったです。また会いましょう」

にこりと微笑み高森さんは席を外した。

「藍子ちゃん良い娘でしたね」

「だろ。圧倒的純粹さだよな」

「ああいう娘に限ってそうじゃないかもですよ、なんて事流石に言えませんか。私もあれは天然だと思えます」

「ああ。そういやお前猫被ってなかったけど」

「天然の娘に対しては素の方が楽なんですよ」

使い分けを覚えたか。一色も少しずつだがアップグレードさせてくよな。

「そろそろ俺もトレーニングの時間だ。いくぞ」

「はーい」

「ああ…今日も体が痛え」

「お疲れさまです」

トレーニングを終え俺たちは現在帰路についている。

「先輩普段からあんなにトレーニングしてるんですね」

「いや、今日は特に厳しかっただけで普段はもう少しですよ」

片桐さんは一色を見るなり俺に隅に置けないだの良いとこ見せなきやだの言って普段よりも随分と張り切ったメニユーに切り替えられていた。その間本人は一色と何やら談笑してるしほんと絶許。

「でも確かに先輩逞しくなりましたよね」

「あれだけ鍛えれば流石にな」

「ちよつと腕さわらせてくださいよー」

「嫌だ」

「ケチですね」

「お前は俺なんぞよりもつと筋肉あるやつ腕いつでも触れるだろうが」

「そうですねけど…まったく先輩は分かってませんね」

「なにが分かってないんですかね」

「何でもないですー」

一色がなにを考えているのか、男の俺にはわからない。

女には分からない男のロマンがあるように男には分からない女のロマンがあるのだろうか。

「そう言えば先輩、言い忘れてたんですけど今度からなんの番組に出演したか教えてくださいね」

「は？なんでだよ」

「最近出演する番組が増えてるのでチェック漏れするかもじゃないですか。その予防です」

「見ないって選択肢は無いのかよ」

「無いですね」

「無いのかよ」

俺としてはいじられること多いし気恥ずかしいんだけど。

「あの二人、普段は平気にしてますけど最近先輩が遠くに行つてしまつたつて気にしてるんです」

「俺が遠くに？そんなことないだろ」

「私からしたら学校で会いますからそんなこと感じませんけどね。あの二人はテレビを見ることでしか会えないとなると画面の向こう側の人つて感覚に陥っちゃうんですよ」

なるほど。テレビで見てた俳優さんが共演すると身近に感じる事の逆って事か。俺からしたらそんなことなくても彼女たちにとってはそのうちではないのかもしれない。

「…分かったよ。どうせ隠してもあまり意味無いらしいしな。今度から伝えるよ」

「分かったなら良いんです」

そこまで言われて断るほど俺も人格が終わっちゃいない。

高校生までの俺なら絶対に知らせなかっただろうけど。

「じゃあ私はこっちなので」

「送らなくて良いのか?」

「ここままで大丈夫ですよ!」

「そうか。じゃ、またな」

「はい」

一色の姿が見えなくなるまで見送り俺も自宅への帰路へつく。さて…三日後からドラマの撮影も始まるし今のうちにゆっくり家で休むか。

帰りがけコンビニでビールとチータラを買って俺は自宅へ帰っていった。

9話

先週までの暑さとは打って変わり、秋を感じさせる冷たい風が朝方は吹き込む。

恐らくあと2週間もすれば秋は一気に深まっていくだろう。

静かに太陽が登り、通勤ラッシュが始まる時間の都内某公園広場に世話しなく動き回る大人の集団がいた。

そこそこ長いトレーニング期間を経て、

ついに今日、ここからテレビドラマの撮影が始まる。

「これからよろしくお願いします」

「よろしくお願いしますー！」

「よろしくねー」

俺と片桐さんは共演者の先輩方へ挨拶回りの最中だ。

俺のような若輩者は挨拶回りは欠かせない。

この先長いこと仕事を共にする訳だし何処かで迷惑を掛けてしまいかも知れない。

その時に失礼なやつだと思われて居たのではやはり現場の雰囲気が良い。

映画撮影の時も最初はNGをかなり出してしまっていたが、共演者の人柄も相まって雰囲気は悪くならず穏やか空気を保つことが出来た。

「最近人気の比企谷君。是非とも人気にあやからせてもらおうよ」

「いやいや、こちらこそ吉田さんの人気にあやからせていただきますよ」

「ははっ、任せとけ」

今挨拶している吉田さんは40代男性で、主に警察や医療ドラマで有名なベテラン俳優だ。

今回は俺たちが演じる警察官の課長役で上司にあたる。

高校生の頃の俺でも知っていたくらいなのでかなり有名人だ。

有名故に少しびびってたが気さくな人柄なようで少し安心する。

「で、そちらの女性…主役の片桐さん」

「は、はい！」

吉田さんは次に片桐さんへ目を向けた。

片桐さんとは言えばかなり緊張しているようで頬が強ばっている。

まあ大人と言えどテレビの中の人と話す緊張するよね…。

バラエティーに出て慣れてきた俺だって未だに緊張する。

「よろしくね」

「よろしくお願いします！」

「お芝居は今回が初めてだった？」

「は、はい…」

「まあまあそう緊張しない緊張しない。何かあっても俺たちでカバーするから」

そういつてポンつと俺の肩に手を置いて微笑む吉田さん。

流石っていうか何て言うか…。

大人の余裕？気遣い？そういうのをひしひしと感じる

俺も40代になれば同じことが言えるのか…？まあそれまで俳優を続ける気はないが。

まだ専業主婦の夢！諦めてないからな！

「ありがとうございます」

「吉田さん。僕もまだ駆け出しなんでフォローされる側と思つて欲しいんですが…」

「大丈夫大丈夫！俺、あの映画見たんだけどね、比企谷君なら心配してないから」

「ええ…。勘弁してくださいよ」

はははつと朗らかに笑う吉田さんとげんなりする俺を見て片桐さんは頬が緩み始める。

どうやら少しは緊張が解れたみたいだ。

その事を確認してすこし安心していると、ふと吉田さんと目があう。

吉田さんはやったなど、俺にだけ見えるようにウインクをする。

あらやだ男前（トウソク）。

どこぞのアラサー女教師並みのイケメンっぷりだ。

俺が女の子なら即惚れてラブなレターを認めて、振られるまでしてただろう。

どうでも良いがこのイケメンは女の子を振るときはどんな風に振るのだろうか。男前な振り方を是非教えてほしい。

もちろん実践する予定など未来永劫ないだろうけどね！

「それじゃ、他の方にもご挨拶してきますので」

「おう。また後でなー」

さて、まだまだ共演者は沢山居るしスタッフにも挨拶せねば。

撮影開始時刻までそこまで余裕がないので急がなくては。

「じゃ、行きますよ片桐さん」

「うん」

先ほどに比べ緊張が解れた片桐さんを連れ、挨拶回りを続行した。

—————

「出演者のみなさんーこちらに集まってくださいー」

白い長袖Tシャツにジーンズ、頭には黒いキャップを被った若い男性が声を張り上げる。

撮影開始予定時刻になったと同時に、演者も含めスタッフは一ヶ所に集まってきた。

監督から撮影開始の挨拶があり、最初の撮影としてこの公園でオーピング用の簡単な映像を撮る。

主要メンバーはカメラに背を向けた状態から、振り返ってポーズを決めていくのだ。

ちなみにこのドラマの主要メンバーは主役とその同僚3人、その上司の合計5名で構成されている。

「最初は主役の片桐さんーよろしくお願いしまーすー」

「はいー」

本作の主人公で、ヒロインを勤める片桐さん。

役名は橘 優子（たちばな ゆうこ）。

交通課から少年課に配置変更が決まりつたばかり。

感情のコントロールや人とのつきあい方を身に付けられておらず、非行に走ってしまう少年少女へ全力でぶつかっていく婦警さん。

振り返った後のポーズは両手を腰に置き、仁王立ちでにかつと笑顔を向ける、まさにイメージ通りのポーズ。

「オツケーです！次の方！よろしくお願いします！」

撮影は次に上司役の吉田さん、同僚役の男女二人の俳優がオープニングポーズの撮影は続いていた。

「最後に比企谷さん！おねがいします！」

「はい」

俺は主要キャラの一人で主人公より年下の同僚を演じる。

役名は栗田 浩一（くりた こういち）

基本的にやる気はなくていつも愚痴を漏らしてばかりの役どころだ。

撮影のポーズはポケットに手を突っ込んだままゆっくりと気怠げに振り向く。

普段の状態ほぼそのままだ。警察だしもう少しキリツとしたほうが良かったかしら？

やばいやつぱそつちのほうが良いよな…

一発目からNG出しちゃう！

「はいオツケー！比企谷君バッチシだよ！」

監督がサムズアップしニカツと笑う。

うん知ってた。

—————

その後もオープニング撮影は順調に進み

ついにドラマ本編の撮影に移る。

場所は都内某建物を警察署風な装いに変えた場所で行う。

まずは片桐さん演じる橘の初対面のシーンだ。

少年課と書かれたプレートがぶら下がる執務室で

俺を含めた同僚役3人が警察官の制服を纏いデスクで業務を進める。

「そういえば今日からね、交通課から異動になった新人さんが来るの」
同僚役の女優さんは嬉しそうに話しかけてくる。なお役名は高橋だ。

「あー、そういやそうですね。てか高橋さん随分嬉しそうですね」
「そりゃ、同年代の女の人が増えるんだもん。合コンとか楽しみみでしよ」

艶めかしい唇に指をあてほくそ笑むその姿は流石女優だ。
綺麗な外見も合わさり無敵に見える。

てか本当に綺麗だ…やばい見惚れてしまう。

「またそれですか…恋愛脳め…」

「なによ。文句ある?」

ドキドキする心臓を無理やり押さえつけ平静を装う。

平静といえはこの女優さん平塚先生と同年代だよな…。

見た目じゃそこまで差は無いのに、この如何ともし難い差は何なんでしょうかね。

志々雄と左之助くらい如何ともし難い実力差がある。

「いえ。てかどうせすぐ辞めるでしょ?…この仕事きついし」

「まーそうかもだけどさあ」

「そうとも限らないだろ?」

もう一人の同僚役の男優さんが話に入ってくる。役名は加藤だ。

「また期待してるんですか加藤さん」

「栗田は期待しなすぎなんだよ」

「期待を裏切られても知りませんよ?」

「まあ期待するだけならタダなんだし、良いだろ?」

爽やかな笑顔で返される。

中学生の頃の俺なら胡散臭い顔と嘲笑したであろう顔だが、

高校生活を経て、この業界に身を置いてきたため、信用できる笑顔
もの見分け方も分かって来たと自負している。

この笑顔は信用できる類の笑顔だ。

恐らくこの男優の人柄から出てくる演技だろうな。

俺には出来ない。

「まあそうですけど」

「すみません、ちよつといいですか?」

突然横からハキハキした声で呼ばれ、俺たち3人は一斉に顔を向ける。

「みなさん、少年課の方たちですよね?」

「はい。そうですか?」

「やっぱり! 今日から少年課へ異動になりました橘です! よろしく!」

太陽のような笑顔を振りまける片桐さん。

「俺は加藤。よろしく」

「栗田です。よろしくお願いします」

「私は高橋! てか橘さんかわいい!」

「えーつと、高橋さん? ありがとう」

女二人でワイワイ暫く楽しく談笑タイムだ。

今の所元気ハツラツ系統以外の演技も問題なさそうだ。

これならこのドラマの撮影も乗り切れるだろう。

それにしても、なんだろう。

見目麗しい美少女二人の談笑ならいつも見ていたが綺麗なお姉さん同士の談笑も、良いな…。

え? 酒の席ではよく見てるじゃないかって?

ナンノコトカヨクワカラナイ。

「そういえば課長には挨拶行ったの?」

「あつー! いけない! まだ行つてない!」

アワワワつと慌てて課長の方へ向かう片桐さん。

その演技キツイ。

確かにかわいいが年を考えたらかなりキツイですよね…。

「カット! はいオツケー! じゃあ次のシーン行こうか!」

そんなあざとい演技もオツケーになり撮影は次のシーンへ進んで

いった。

その後も順調に撮影は進み気がつけば太陽は半分程沈み空を燃えるような朱色に染めていた。

撮影は順調に進んでおり、本日撮影予定の最後のシーンを撮影中だ。

片桐さんの演技はNGを出し取り直すこともあったがほんの数度程度だ。

前のカットまでのNG回数だけなら俺とほぼ同程度に留まる。

それほどここまでは順調だった。

「お前たちなんか俺たちの悩みはわかんねえよ！」

「そんなはずない！ 私たちにも分かる！」

「カット！ 片桐さん！ まだ足りないよ！」

そう、ここまでは順調“だった”のだ。

これは夕日をバックに非行少年へ熱い説得を試みるも相手の心に言葉は届かず逆に自分の言葉が如何に薄いかを実感してしまうシーンだ。

「ここは口ではそんなことないって言いつつも心のそこでは少年の言葉に納得してしまい悔しいってシーンだけど、やっぱりまだ片桐さんはその悔しいが全然出てない」

「はー」

「ここは1話目の重要ポイントだ。納得いくまでやるからよろしく！」

「はー」

監督は片桐さんに何処がダメなのかを指導するがこれでもう5回目の取り直しだ。最初の2回目までは確かに片桐さんの演技を改善していると感じた。

が、それ以降は悔しい感情を出そうとするあまり演技感がある演技になってきてまっている。

非常に演技っぽい演技と言えば分かるか、嘘臭いのだ。

度重なる失敗がプレッシャーになり、心なしか表情も引きつってきている。

「そんなはずない！私たちにも分かる！」

「カット！やっぱりまだダメだな……」

「監督。そろそろ時間が……」

「ん？……ああ。もうすぐ日が沈むか……」

監督は撮影スタッフが時刻を告げた後表情が曇る。

出来るまでやると言うがこのシーンは夕日がバックある時に撮影する必要がある。

当然一日のうち、夕日がある時間は限られているため時間制限はどうしても設定されてしまうのだ。

「片桐さん！時間的に次が今日のラストチャンスだからそのつもりでよろしく！」

「は、はい！頑張ります」

元気よく、きりつとした表情で返事をする片桐さん。

ああ……そんな気負いすぎた状態じゃきつとだめだ。

あれだけレッスんしてきた成果を出すことなんて出来ない。

「カット！うーん……仕方ない、このシーンは明日取り直すことにしようか。今日の撮影はここまでです！皆さんお疲れさまでした！」

予想通り気負い過ぎた片桐さんは台詞を囁んでしまい

結局このシーンの撮影は明日に延期されることになった。

「……」

撮影が持ち越しになると告げられた片桐さんはいつものような真っ直ぐで明るい笑顔はなく、肩を震わせ俯きながら下唇を噛み、悔しきや不甲斐なさに打ちひがれる、そんな表情で現場に佇んでいた。